関西自然保護機構会報 19(2)：131－134，1997

ワシ・タカの保護問題

京都大学名誉教授　四手井　綱　英

PROBLEMS IN THE COSERVATION OF RAPTORES

Tsunahide SHIDEI　*Emeritous Professor of Kyoto University*

稀少動物の保護の問題から，近頃何処でもワシ・タカ類の保護が，開発に対応して大きな問題になって来ている。私が自然保護問題で永らく関係している京都府の近くでも，非常に数多くのタカの保護関係の課題が，府内各地に出て来ている。私が初めてタカの保護に関係したのは，いわゆる学研都市の主要部をなす，奈良県境に近い京都南部の里山を開発して造成されつつある新都市であった。新都市の　中央部にあたる古い池のある地域を利用して，京都府が，記念公園の造成を計画した。この公園の中心になる池のある地域は開発している学研都市の中核地区との高低差が著しく大きいため，全体をあらかじめ埋めたてて平な土地を造成してから，改めてそこへ池のある日本庭園式の広い庭園を持つ公園を造成しようとしていたようだ。この古い池のまわりには，里山特有のアカマツ林が広がっていたが，そのアカマツ林にオオタカの巣が見付かり，そのあたりを飛びまわるオオタカの姿が目撃されたことから，このあたりの自然保護団体が中心となり，新しい公園の造成に反対し，オオタカの保護を訴えた。私は京都府の自然環境保全審議会の会長を長年務めていることもあって，この府の公園新設に関し，直接知事に意見を述べた。その大要は，①公園は現在の自然地形をそのまま利用して造成し，地形の変更は一切行なわないこと。②アカマツ林を含む自然の二次林をオオタカが住めるだけ残すこと。その面積は少なくとも30～40ha以上とすることであった。しばらくしてからの知事からの返事は，大体私の申し出を満足させるものであったので，了承してこの線で公園の造成は進められ，私もこの公園造成の顧問をして，完成させたが，昔のままの池の北半分は，手をつけず，自然のままで残され，南半分に造園が行なわれた。アカマツの自然林は30haほど残り，タカの巣もこの林の中で残ったのだが，この巣はその後も使用されなかった。公園は南半分を造成して出来あがったが，このあたりを飛んでいたタカは，その後何処かへ姿を消したとも言われているが，私は恐らく数年中にはまた元の通り飛びかうものと思っている。残った自然の二次林のアカマツ林はここだけでなく，その北側に自衛隊の火薬庫があって，この火薬庫は地上には殆んど建物がなく，総てが地下にある構造物であるため，かなり広大なアカマツの二次林が手付かずで残っていて，タカ類の棲息には良い条件の地域を造っている。そして池の端にあった巣は近年営巣していないものだった。

次に同じ学術研究都市の南京都にあたる木津団地の開発に際しても，オオタカの保護が問題になった。この時も，私はこの地区の開発を担当している開発公団にたのまれて，オオタカの保護と開発との関係の調制に当たった。この地区のオオタカは，地区南部のアカマツ林の稜線に近いアカマツの大木に少なくとも3カ年続けて営巣して，ひ

関西自然保護機構業績　第199号

なを毎回育てている。結論を言うと，オオタカの営巣樹を中心として約40haを開発から除外し，さらにその周辺の約40haを緩衝地帯として，開発はするが現状のアカマツを含む二次林を出来るだけ残して，その森林内に点々と研究施設を造成する研究施設地区にした。一般の住宅開発は，この団地の最南端の部分に限ることにして，そこにも可能な限り緑地を残すように設計すると言う案で，ほぼ落着し，この案は後で保護を唱える団体も了承したらしい。

この案が一応出た頃，今度は，京都市の北部の北桑田の山地を東西に横断する林道が計画されていたのだが，その路線沿いで色々な珍しい林相や大形の台杉状のスギ個体が何本もあらわれたり，稀少種のシジミチョウの住むウラジロガシの群落が出て来たり，ワシ，タカ類の生息地があったりして，府民から林道開設の見直しを求める声が高くなった。このことにも私は求められて，委員長として関係するようになったし，市の北部鞍馬街道沿いの市原で計画された京都市清掃局の清掃工場予定地にもタカ類が飛来し，その保護に関して意見を求められるし，関西電力の火力発電所の予定地の舞鶴市北東部の半島にもワシ，タカの巣が，進入路の近くから発見され，それに対する施策にも私が関係することになった。さらに極く最近，舞鶴市の西部に計画されて一部工事の始まった林道沿いにも2カ所クマタカの巣が見付かり，その一方が営巣をはじめていると言う問題も私の所へ廻って来た。この他，滋賀，岐阜県境の山地に計画中の揚水ダムの近くからは，クマタカの他，イヌワシの巣も発見され，この問題にも私は関係している。

このようにあげて見ると，先ず気が付くのは，以前環境庁が調査した時の，ワシ・タカの棲息数より，実際にはかなり多い数のワシ・タカ類が現存しているらしいことだ。京都府の内外には，オオタカやクマタカは開発が問題になる所に必ずと言ってよいほど棲息し，営巣している。

上にあげた開発と関係した，ワシ・タカの他にも京都の東山や西山，さらに北山からは，沢山ワシ・タカの情報が私の元に来る。つい先日も，私の住む山科の私の家の裏に残る極小面積の竹藪で，キジバトがオオタカにおそわれた。私の孫の男の子が目撃して，タカをおい払い重傷のハトを救助して，動物園へ持って行く事件が発生した。おそった鳥は早速図鑑で調べ，オオタカらしいと見当をつけたが，多分山科の北側の大文字山の山林から飛来したのだろう。以前にも，家敷村の大きなセコイアの梢に巣を造っているカラスの雛がやられて落ちていたことがあったが，ひょっとするとこれもタカの仕業だったかもしれない。京都御所の外苑では，ドバトをオオタカが狩りに来ると言われるし，京都の西にあたる老が坂に近い住宅団地では，団地に新しく造成された，小鳥を呼び集めるための森の中の人工池に飼育されていたカモが，近くの山から飛来したオオタカに殺されたと言う。

京都の北部には街の中に鷹が峰とか，高野（鷹野だと考えられる）等のタカにちなんだ地名が古くからあるが，そのあたりには，今でもタカが生息しているのだ。さらにワシ・タカ類でもオオタカやクマタカなどは人の生活を充分に知っていて，巧みにそれを利用して生活していると考えた方が良いようだ。オオタカやクマタカは人が以前からしばしば入って下刈りをしたり，落葉を集めたり，高木をぬき切りしたりしている里山に住み，餌は農地や果樹園などという，人の造った開放地を利用してとって暮す。こう言ったタカ類の生活を考えると，彼等は決して人ぎらいではないようだ。

お互いにうまくつきあって行けば，共存は可能なのではなかろうか。大型のイヌワシなどになると，里山には住まない。さらに奥の人の気配の余

り無い山中で生活しているが，狩りをして餌物をとるには密林より開放地の草原などが良いらしい。私も以前白山山頂に近いお花畑や，月山のこれも山頂からさほど遠くない雪田でイヌワシにあったが，月山の雪田ではウサギをとるのを1時間以上見ていた。この時は残念ながらウサギをとりにがしてしまった。何回かダイビングを繰り返したが，その都度逃げられ，最後にウサギはハイマツ群落へにげ込んでしまった。開放地でもそう簡単には餌物は獲れないらしく，林の中だともっと困難になるのだろう。こう考えて来ると，イヌワシも巣の近くに皆伐地を作り植林して，ウサギを増やしてやることも，ワシの保護の一対策になるのかも知れない。とも角，人の行為の総てを拒否することが，ワシ・タカの保護策ではないことは確からしい。特に営巣中のワシ・タカは過敏になっているから，開発行為を中止するのは当然だが，その他の時期なら，十分注意してやれば，開発の仕事とワシ・タカの保護の問題とをたくみに解決出来そうだ。使っている巣のある木や岩峰などからどれだけ離れればよいかなどは，今後実例を重ねることによって，次第に分かって来るのではなかろうか。

もちろん，現段階では，十分慎重に行動しなくてはならないだろう。無用な開発まで実行しようと言うのではない。どうしてもやらねばならない開発の場合に限って，十分に慎重に行動して，保護と開発を両立させたいものと思っている。

さらに全く奇妙なことであるが，現在ワシ・タカの保護が問題になっているのは，公共事業としての開発や，大きな企業体による開発が生じた時，その開発予定地域にワシ・タカの巣が発見された場合だけで，その他の民間の所有者の行なう開発などでは，目前にワシ・タカの巣や付近での行動が調査されることは殆んどないので，森林が伐狩されようが，宅地化されようが，ワシ・タカ保護問題が話題になることはない。それでよいのだろうか。さらにワシ・タカの巣が総て調べられているかと言うと，決してそんな綿密な調査は行われていない。

また現在ワシ・タカの保護問題の出ている開発予定地で，開発をやめれば良いと言う意見が，しばしば出されるが，公団などが，多人数の持つ私有林を一括して，開発しようとしているのだから，開発をやめ元の私有林の所有者にかえれば，それらの所有者は恐らくワシ・タカのことは考えずに色々な開発をやる恐れが多分にある。

そうなれば，ワシ・タカの保護などは何処へ行ってしまったか分からなくなってしまうだろう。もしもオオタカの生息地を充分に調査し，その総てを「鳥獣保護区」にするとすれば，恐らく里山の総てが「鳥獣保護区」になってしまうだろう。これは現行の鳥獣保護行政では実行不可能だろう。それならばむしろヨーロッパの各国のように，国土を総て鳥獣保護区とし，その中に猟区を点々とちりばめるような保護行政に代えた方がよいことになる。

現在では奇妙なことだが，開発が生じた所にだけ，保護が出来，その他では野放しと言う状態が続くことにしかならない。

以上で私のワシ・タカとのかかわりの話を一先ず終わるが，私は森林生態学を専攻しているので，鳥類も森林の構成要員の一員だから，ワシ・タカの保護問題に関係しても別に悪くはないが，ほんとうの専門と言えば森林という群落の生活の仕方だろう。それが最近どうしてワシ・タカのことにかかわるようになったかと言うと，全く普通には考えられない因果関係があったからだ。このことを付記しておきたい。

私は京都大学を停年で退職して，しばらくたった時だったが，今西錦司さんにたのまれて，当時内部のごたごたが続いていた，犬山市に所在する

“日本モンキーセンター”の改革のための委員会の委員長を勤めた。私はサルに関しては全く素人だったが，サルも森林の動物だから，森林生態学者が委員長になり，改革に関係してもよいだろうぐらいの軽い気持で，他ならぬ今西さんの要請だから委員長を引き受け，何回かの会合のすえ，モンキーセンターの改革案を作成し，スポンサーの名古屋鉄道の社長に提出した。その結果，スポンサーは切角よい改革案を作ってくれたのだから，委員長自らが，センターの所長になり，改革を実行してほしいと言うことになった。

霊長類学を全く知らない私が，またサルも森林の動物だからと言うだけで，この申し出を受けてしまった。そして私は５年間で改革出来るだろうから，５年間だけ所長をすると約束してしまった。内部の改造のことは直接関係がないから略すが，モンキーセンター所長になった頃，環境庁の審議員になることになり，これも承諾したが，環境庁はモンキーセンター所長だからと言うことから，私を動物部門の審議員にしてしまった。この当時思い出に一番残るのは，佐渡に残った数羽のトキを捕獲して，人工飼育して繁殖をはかることの可否を決めることだった。私だけが反対した。理由は少数になったトキで，うまく繁殖出来るはずがないから，死滅させるだけなら野外にそのままにしてやってほしいと言うことだった。環境庁の動物専門にしたため，その後私は審議員の他でも，動物の保護に関係するようになった。その一つは逗子の米軍宿舎問題のある旧弾薬庫跡のワシ・タカの調査で，委員長をやらされたことだ。そんなことから，鳥の保護，特にワシ・タカの保護が私の一つの趣味のようなものになってしまった。

樹木や森林の専門家がこうしてワシ・タカの保護を方々で引き受けることになったが，幸いほんとうの専門家が常に進んで委員になって仕事をしてくれるので，私はそれらの専門家の言にしたがい，方向さえあやまらなければ，安心して委員長が務まるのだ。ほんとうに有難いことだと思っている。